

今後の県立高校に関する地域検討会議（第１回）（中部地区）
意見交換の記録（要旨）
【花巻市、北上市、遠野市、西和賀町】

令和 7 年 5 月 23 日（金）

花巻市定住交流センターなはんプラザ COMZ ホール

上田 東一 花巻市長

- ・ 中部地区では他地域からの生徒流入や私立高校への入学者が多いが、それだけ地域に魅力がある証と受け止め、学級数の維持などを通じて地域の高校を守っていただきたい。
- ・ 医科学の専門コースについては、理数科との違いが不明確であり、新設の必要性や目的についての説明が求められる。
- ・ 医学部進学に関しては、県内志願者の学力の課題が指摘されており、中高一貫教育等を通じた学力向上が不可欠であると考ええる。
- ・ ブロックと学区の関係が分かりづらいため、制度の構造について明確な説明をお願いしたい。
- ・ 大迫高校については志願者が少ないものの地域に必要な学校であり、小規模校全体のバランスを考慮して存続を検討していただきたい。

八重樫 浩文 北上市長

- ・ 北上翔南高校は、総合学科の中で農業系列を維持できたことについて評価している。
- ・ 当管内では全業種で人手不足が深刻であり、特に製造業においては専門学科・系列の存在が非常に重要である。
- ・ 黒沢尻工業高校のように、半導体などの最先端分野に対応した独自のカリキュラムを導入する学校の取組を評価し、今後は志願者増と理工系人材の育成に繋がるよう専門学科の魅力化及び充実を求めたい。
- ・ 国の理工系人材育成戦略の流れも踏まえ、高校段階から文理のバランスを意識した教育体制の整備を進めて欲しい。

多田 一彦 遠野市長

- ・ 教育の根本は子どもたちにとってどうあるべきかであり、県と地域と一緒に学校の在り方を考えていく必要がある。
- ・ 遠野市内の高校は特色ある教育を展開しており、特に遠野緑峰高校は人数こそ少ないものの、地域と密着した教育により生徒の成長を実感している。
- ・ 総合学科高校や中高一貫教育に非常に魅力を感じている。
- ・ 議論に時間をかけすぎず、地域事情に配慮しつつできるだけ核心に迫った議論を進めるべきである。

内記 和彦 西和賀町長

- ・ 令和 7 年度の定員増に関して配慮を頂き大変感謝している。
- ・ 高校の魅力化は地域の魅力化に繋がっていると実感しており、今後も地域との連携を重視した支援をお願いしたい。
- ・ 定員増に伴う教職員の配置について、現場の負担が大きくなっていることに配慮し、より一層のお力添えを頂きたい。

佐藤 良介 花巻商工会議所 副会頭

- ・ 人口減少や少子化が進む中で、地域を担う人材の育成において高校教育の重要性が増している。教育の機会の保障と質の保証の観点から今後の高校の在り方を検討して欲しい。
- ・ 花巻地区の高校は、地域の伝統や特色を生かした特色化・魅力化に取り組んでおり、探究学習や地域連携、ボランティア活動などが推進されていることを心強く感じられる。
- ・ 大迫高校では郷土芸能やブドウづくりなど地域との関わりが深い。地域に根差した活動を行っている高校については存続を強く求める。
- ・ 地域全体で人手不足が深刻化している中、専門学科の充実による人材育成の強化が必要である。また、普通高校への単位制導入に関して、より詳しい説明をお願いしたい。

新渕 伸彦 農事組合法人リアル 代表理事

- ・ 花巻地区では、盛岡地区への進学希望者が多く、地域の高校の魅力向上が求められている。
- ・ 専門高校において、子どもたちが進んで通いたくなるような、特色ある高校づくりを進めて欲しい。
- ・ 盛岡地区の高校へ進学後、大学に進学し地元に戻らない生徒も多いため、「学校が楽しかった」という思い出が残るような教育環境が必要とされている。
- ・ 農業は今後も重要な産業であり続けることから、農業高校について、より一層の支援をお願いしたい。

今野 好孝 北上商工会議所 理事専務

- ・ 西和賀高校の定員増となった背景や要因は、他校においても参考となり学ぶべき事例である。県や西和賀町の取組による相乗効果を分析し、今後の施策に生かしてほしい。
- ・ 地区割の見直しにより通学エリアが広がる中、特に遠野市の編入に伴う交通手段が生徒にとって実際に利用可能で持続可能なものか懸念がある。また、地区間交流の実態が把握しづらく、私立高校を含んだ数値では公立高校の動向が見えにくいため、実態を正確に捉える分析が必要ではないか。
- ・ 人材育成の観点から、工業高校の魅力化と通学エリアの柔軟な設定が重要だと感じる。工業クラブ関係者からも工業高校の充実を求める声がある。

桶田 陽子 農事組合法人宮守川上流生産組合 代表理事組合長

- ・ 地域資源を活かした6次産業化に取り組んでおり、地元の遠野緑峰高校と連携して加工指導や商品化などを行っている。
- ・ 高校で地域連携を経験した卒業生が、その経験をきっかけに、地元の法人で即戦力として働いており、高校での経験が地域資源を活かした仕事への関心や定着に結びついている。
- ・ 高校の再編は避けられない課題であるものの、小規模校だからこそ地域と密接に連携し、魅力ある教育や地域づくりが可能であり、地域の魅力を掘り起こせる人材育成を進めて欲しい。

阿部 真奈美 早池峰興業株式会社 役員

- ・ 私立高校や県外からの進学、県外への流出も含めたデータを示していただけると、県立高校との比較や地域の実態把握に役立つ。
- ・ 遠野地域の高校は地域に根ざした活動を通じて地域を元気にしており、進学者数だけでなく生徒の地域貢献などの内容も考慮して高校の在り方を検討していただきたい。

酒本 涼子 サロン・ド・愛

- ・ 西和賀高校が1学年2学級となったことに深く感謝しており、町を残したいという強い思いのもと、高齢化が進む中でも町民が一体となって子どもたちを支えてきた成果であると捉えている。
- ・ 多様な背景を持つ他県からの生徒を受け入れる中で、今後は地域としても学びながら共に成長していく必要があり、1学年2学級体制は新たなスタートである。
- ・ 私立高校の授業料無償化の影響で県立高校の選択肢が弱まる懸念がある。通学手段としての JR 線の維持や、今後も町民が学校支援に熱意を持ち続けられるかが課題であるとする。

鎌田 優見 花巻市PTA連合会 会長

- ・ 高校の魅力が子どもたちに十分伝わっていない現状を踏まえ、中高連携や体験学習、小中高が一体となった取組を進めることで、地域内の学校への親しみや理解を深め、盛岡地区や県外への進学を抑えて地域への定着に繋げることが重要である。
- ・ 少子化に伴い定員割れが常態化する中で、受験に対する緊張感やモチベーションが薄れている。定員の見直しや競争率の適正化によって学習意欲を高める工夫が必要ではないか。

北川 祥樹 遠野市PTA連合会 会長

- ・ 遠野市が中部地区に編入された意図が不明であり、区域変更による進学傾向や定員枠への影響が懸念される。通学圏の実態に地区割が合致していない可能性がある。
- ・ 私立高校は特色ある活動（ダンス、女子野球など）や受け皿の広さで魅力が高く、目的意識をもって選ばれている。一方、県立高校にそのような魅力や競争力があるのか疑問が残る。
- ・ 黒沢尻工業高校の半導体教育なども魅力はあるが、情報発信力が弱く、十分に認知されていないため、より効果的な広報が必要である。
- ・ 小中学校段階から郷土学習を強化し、子どもたちに「地域での楽しい記憶」を残すことで、将来のUターンや地域定着につながる可能性がある。
- ・ 農業体験学習の田植えについては、現代の農業実態に即し、「大変さ」だけが伝わらないよう、楽しさややりがいも感じられる内容への見直しが必要ではないか。

小林 武史 西和賀町立湯田中学校PTA 会長

- ・ 西和賀高等学校の1学級増は、町や同窓会の取り組みの成果として感謝している。今後は中学卒業生が20人前後の推移の中で高校の存続を実現するため、継続的な支援と工夫が必要である。
- ・ 高校の魅力化だけでなく、特色化にも注力し、地域内外から生徒を呼び込める高校にするため、PTA・同窓会も積極的に支えていきたい。

佐藤 勝 花巻市教育委員会 教育長

- ・ 今回の長期ビジョンに花巻市の意見が反映されたことに感謝している。国の中央教育審議会特別部会で検討されている高校のグランドデザインの観点が基本方針に盛り込まれている点を高く評価し、これを第3期県立高校再編計画のスタートと捉えている。
- ・ 中央教育審議会の4つの観点のうち、特に多様性への対応がこれまでの計画と異なっている。急激な少子化の中で、地域やまちづくりの実態を踏まえ、制度の在り方を柔軟かつ丁寧に設計する必要がある。
- ・ 各学校が独自性を持ち、ブランド化していくことが求められる。地元教育委員会としても小中学校と連携し、地域全体で教育の質を高める取組を進めたい。
- ・ 学びの枠を超えて、産業界と連携した教育、文理横断的なカリキュラムを取り入れた教育の必要性がある。時代の変化に合わせた発想の転換と強い実行力が求められる。
- ・ 岩手県の教育課題は「学力向上」と「不登校や不適応の子どもたちへの学びの保障」である。単

位制導入に加え、難関大学進学を可能にする制度設計や、特に中部地区での中高一貫（施設一体型）教育の整備が必要である。

- ・ 通信制、定時制だけに頼らず、公立全日制の中で不登校傾向の生徒も受け入れられる特例校・特認校の設置を検討すべき。大迫高校のような小規模校の実践を参考にしながら、多様な生徒に学びと自立の機会を保障する教育制度を構築すべき。

船田 浩 北上市教育委員会 教育長

- ・ 黒沢尻工業高校の半導体科目新設は、「何が学べるか」を具体的に示す取組であり、生徒にとって最も健全で根源的な進路選択の魅力として高く評価されている。
- ・ 半導体教育において、県の施設や地域産業界をリソースとして活用し、地域のまちづくり施策と一体的に取り組む姿勢が、高校と地域が支え合う理想的な関係づくりに繋がっている。

佐々木 一人 遠野市教育委員会 教育長

- ・ 地区割と通学区域の乖離を考慮した学びの環境整備が必要であり、子どもたちが笑顔で過ごせる学校生活を実現したい。
- ・ 広域な遠野市においては通学距離が大きな課題であり、身近に学びの場があることが教育の機会均等に繋がる。
- ・ 市長部局、教育委員会、高校が連携して高校の魅力化に取り組んでいる。特に、遠野緑峰高校では地域人材を活用した農業教育を展開しており、地域にとって重要である。
- ・ 授業料の無償化により公私立間の志願者の流れが大きく変わることが予想される。県立高校の在り方については、今後が正念場であり、魅力ある学校づくりを教育委員会としても応援したい。

柿崎 肇 西和賀町教育委員会 教育長

- ・ 長期ビジョンの策定に用いられたデータが豊富であり、特に「小規模校で学びたい」と答えた生徒が40%にのぼる点は、生徒のニーズを把握するうえで重要である。
- ・ 40人定員が適切かどうかについて再検討の余地があり、子どもたちの学びの多様性や情熱に応じて、例えば30人定員といった学級編制を検討する必要があるのではないかと。

横手 勝美 花巻市校長会（花巻市立花巻中学校長）

- ・ 少子化の影響で志願倍率が1倍を超えるのは難しい状況である。別室登校の生徒も受け入れるなどそれぞれ学校の特色を活かした教育を行っているので、学校の存続を前向きに検討して欲しい。
- ・ 地域から「仕事の厳しさや大変さも教えて欲しい」という声があり、若者の早期退職が増える中、職業体験などで現実の厳しさにも触れる教育が必要であると感じている。

堀村 克利 遠野市校長会（遠野市立遠野中学校長）

- ・ 人口減少に伴い学校の在り方の検討が必要と感じている。広域での配置に関しては具体的なプランの提示が次の一步につながるのではないかと。
- ・ 遠野高校では、地元企業や台湾との連携など、特色ある魅力化の取組を実施しており、中学生や保護者にも分かりやすく伝わる工夫が必要とされる。
- ・ 大槌高校のようなモデルを参考に、人材・資金・大学や専門機関との連携など、魅力化に向けた体制整備を進めてほしい。
- ・ 宮守地区の一部生徒が花巻学区に含まれているように、実態に即した学区の特例について検討が必要であり、柔軟な対応が望まれる。

加藤 建一 北上市校長会（北上市立南中学校長）

- ・ 募集定員の見直しを求める声があり、高校授業料無償化を踏まえた公立、私立間の協議が必要ではないか。定員割れの中で学習、進路指導に苦慮しており、都市部と小規模地域で同じ 40 人学級であることへの公平性にも疑問が出ている。
- ・ 地元企業のニーズに応じた学科改編（黒沢尻工業高校の半導体関連）により、特色ある教育を展開し、進路指導が行いやすくなることが期待される。
- ・ 特別支援学級在籍生徒の多くが普通高校を希望しているものの、入学後の指導や就職等の進路への対応に課題があるため、より丁寧な配慮が求められている。
- ・ 不登校・不適応の生徒の進路確保が課題であり、小規模校による温かい対応や学びの多様性へのニーズが高まっている。チャレンジスクールの公立での拡充が望まれている。

上田 東一 花巻市長

- ・ 医学コースには特別の授業等はあるのか。
- ・ 医大ごとに入試科目や傾向が異なるため、個別対応は現実的に難しいのではないかと。
- ・ 医系志望でも、まずは「全体的な学力向上」が重要だと考える。

西川 信明 学校教育室高校改革課長

- ・ 単位制の導入により、学校が独自に教材を作成し、生徒の志望する医大の入試に合わせた「学校設定科目」として特化したカリキュラムを編成することが可能になる。これは学習指導要領にとられない内容である。また、教員加算を活用して、複数科目を設置することを想定している。
- ・ 現在は教育課程を作成中の段階で、詳細は今後具体化していく予定である。

上田 東一 花巻市長

- ・ 「ブロック」と「学区」を分ける理由がやはり不明確で、説明不足だと感じている。
- ・ 医学部進学希望者への教育が、特定大学の受験対策に偏ることには懸念がある。
- ・ 医大や東北大学の医師からも「岩手県の学力向上施策が足りない」との指摘を受けており、医師不足の背景には、進学後に県外へ流出してしまう現実がある。
- ・ 受験対応の改正ではなく、抜本的に学力を底上げする仕組みが必要である。
- ・ 首都圏の中高一貫教育校が大学進学で成果を上げており、岩手でも中高一貫教育の導入を検討すべき。

北川 祥樹 遠野市PTA連合会 会長

- ・ 子どもたちが「行きたい」と思えるような学校づくりを行って欲しい。普通科にしか学区適応が無いことは子どもたちも知らない可能性が高いので、より丁寧で分かりやすい情報提供が必要である。

鎌田 優見 花巻市PTA連合会 会長

- ・ 中高一貫教育校の設置は面白いと思う。地元から生徒が流れてしまう懸念はあるが、定員の見直しにより対応は可能ではないかと考える。
- ・ 子どもは大人目線での「良い学校」がどのように良いのかわからないため、体験や交流を通じて良さに気づけるような取組や、高校と中学校で交流の場を持つといった連携が必要ではないかと。

堀村 克利 遠野市校長会（遠野市立遠野中学校長）

- ・ 40 人定員について、例えば 35 人定員への変更については県で議題になっているのか。
- ・ 定員の特例的な措置を地域にあわせて実施できないか検討頂きたい。

西川 信明 学校教育室高校改革課長

- ・ 現在、高校の1学級40人定員は国の標準法に基づいており、国の財政措置もこの基準に基づいている。県では、広域な地理的条件を踏まえ、35人や30人でも編成できるよう国に要望を出しているが、実現には至っていない。
- ・ 他県では独自予算によって少人数学級を実現している例もあり、岩手県でも中山間地や過疎地域の高校を対象とした特例的な対応について必要に応じて検討していく。

酒本 涼子 サロン・ド・愛

- ・ 「地域みらい留学」への参加を通じて、西和賀町のような小さな地域でも、全国から生徒を呼び込むチャンスがあることを実感している。生徒の興味を引く要素（例：温泉）などが大切。
- ・ 最近の中高生は「何になりたいか」よりも「どこで3年間を過ごしたいか」という視点で学校を選ぶ傾向が強まっており、全国的に生徒の価値観が変化している。
- ・ 岩手県としても、こうした「いわて留学」へのニーズや意識の変化を踏まえ、全県的に取組を強化していただきたい。